3．箱田城

群馬県文化財保護審議会委員　　山　崎　　一

箱田城は、勢多郡北橘村下箱田の字城山に城の主体部を置き、東北200m程の中屋敷附近(下曲輪と呼ぶ)が根小屋となっていた。本城と根小屋の間の小流が水の手であろう。

現国道17号沿いの地帯は、中世の頃は利根川の河道であって、田口から橘山の東側を北上する道は、下箱田、下真壁を経て八崎城（分郷八崎）に通じていた。城山、中屋敷間の道もその一部であろう。

その通路に近く、箱田、真壁、塚原の三城が構えられていた。

本城の最高所は、国道面よりは50m高いが東側の中屋敷からの高さは20mにすぎない。

本城の大部を占める本丸は、西北－東南の長径100m、幅40mの楕円形で、高さ２m程の土居をめぐらしていたが、近年、老人保養施設ができて、北部が破壊されてしまった。

本丸面から４～５m低い所をめぐって堀が掘られているが、堀底は平らで(箱形という)、外縁は、高さ１mばかりの土居状をなす。この堀自体、二の丸の役目なのである。

外縁の土居上には柵が結われ、四面に戸口が設けられていたらしく、その痕跡と、そこから下の小径が認められた。

本丸には、東北面の南寄りに坂戸口が開き、反対側の、西南面北寄りには武者屯の窪所がある。今は明らかでないが、武者屯の南端にも坂戸口があったのではあるまいか。

北隅には櫓台があり、台の西北下に坂戸口があったらしく、小さい竪堀様の部分があった。

本丸東北面南寄り戸口から北に向かって下り、堀状の二の丸を越えた所に追手戸口が設けられていた。本丸の戸口と追手戸口との間の部分は、馬出しとして役立つ。

追手戸口と、二の丸のこの附近も喰違い構造になっている。

今次（1989年１月）の発掘調査で、本城の西北200mの下方に堀跡が検出された。基盤での上幅４～５m、深さ２m程度の急な薬研堀で、長さ20mあまりの部分である。

そこは字を向山というが、城山の斜面が利根川河道に落ちる崖端に迫っていて、直下に用水路と国道17号線を通じているが、中世の頃は、川水が直接当っていた所とも推定される。坂東橋東たもとからここまで250mほどである。

河崖はこの附近から北東に転じ、本城の北西200mの線に、長さ200mの弧を画き、数mの崖下に木曾川の小支流が流れて、自然の要害となっている。今回検出された遠構は、その崖端に沿って掘られていると推定される。それは、本城の東北面、東南面にまで掘られているかも知れないが不明である。

この城は、木曾義仲の郎党今井兼平の裔と伝えられる今井氏や高梨子、小野沢氏らの寄居として築かれたものと推定できるが、白井城周辺に散在する猫、宮田、三原田、八崎、真壁、伊熊、金井、渋川、横室、箱島等の寄居や前橋周辺の関根、青柳、清王子、三俣、天川の寄居のように平坦地か崖端に構えられているものとは異り、丘の頂点を占めている点、真壁城（真壁の寄居とは別）と共に異例である。おそらく築造の時期と事情が異るのであろう。

寛文12年（1672)、三原田の永井実平が、当時米沢に住んでいた長尾景光（白井長尾の正系）のために認めた長文の書状に「古へ御領分境々之儀御尋に候 —— 中畧 —— 厩橋境は神谷三河被指置候。」とあり、正徳３年（1713)、前橋藩士渕岡武太夫が、祖父有川彦太夫の遺稿に基いて記し、天徳寺に送った書状には、「利根川より東廻りには八崎村に搔上有之所に居申候者吉田甚之丞跡絶、箱田へ境地搔上有神谷内のもの金井新

右衛門と申すもの罷在候。」と書かれていて、木曾川が白井領の南限となっている。箱田城は厩橋領の北限に築かれた城という事になる。

今次発見の箱田城遠構え堀が、白井領との境めの木曽川に備える位置にあることも、以上の点から肯定できるように思われる。

但し、永禄3年（1560）、長尾景虎（後の上杉謙信）が初めて関東に出陣した際、景虎に従った関東諸将とその陣幕紋を列記した「関東幕注文」という文書（山形の上杉家所蔵）には、神谷氏は、白井衆中でなく、惣社衆中に記されている。神谷図書が白井長尾に属したのは、長尾憲景が北条氏に従った後のことであろうか。

箱田城は、その行き届いた構造から、天正年間のものではないかとも考えられ、この城と、箱田地衆とに関する史料が全く見当たらないのも、それによるのかも知れない。

（1989年2月）

（註）　木曾川は木曾三社神社附近を流れる川で、この社は源義仲の郎党今井兼平の裔等の祀る神社。

追記

山崎先生には平成2年1月3日に御逝去されました。慎んで哀悼の意を表します。

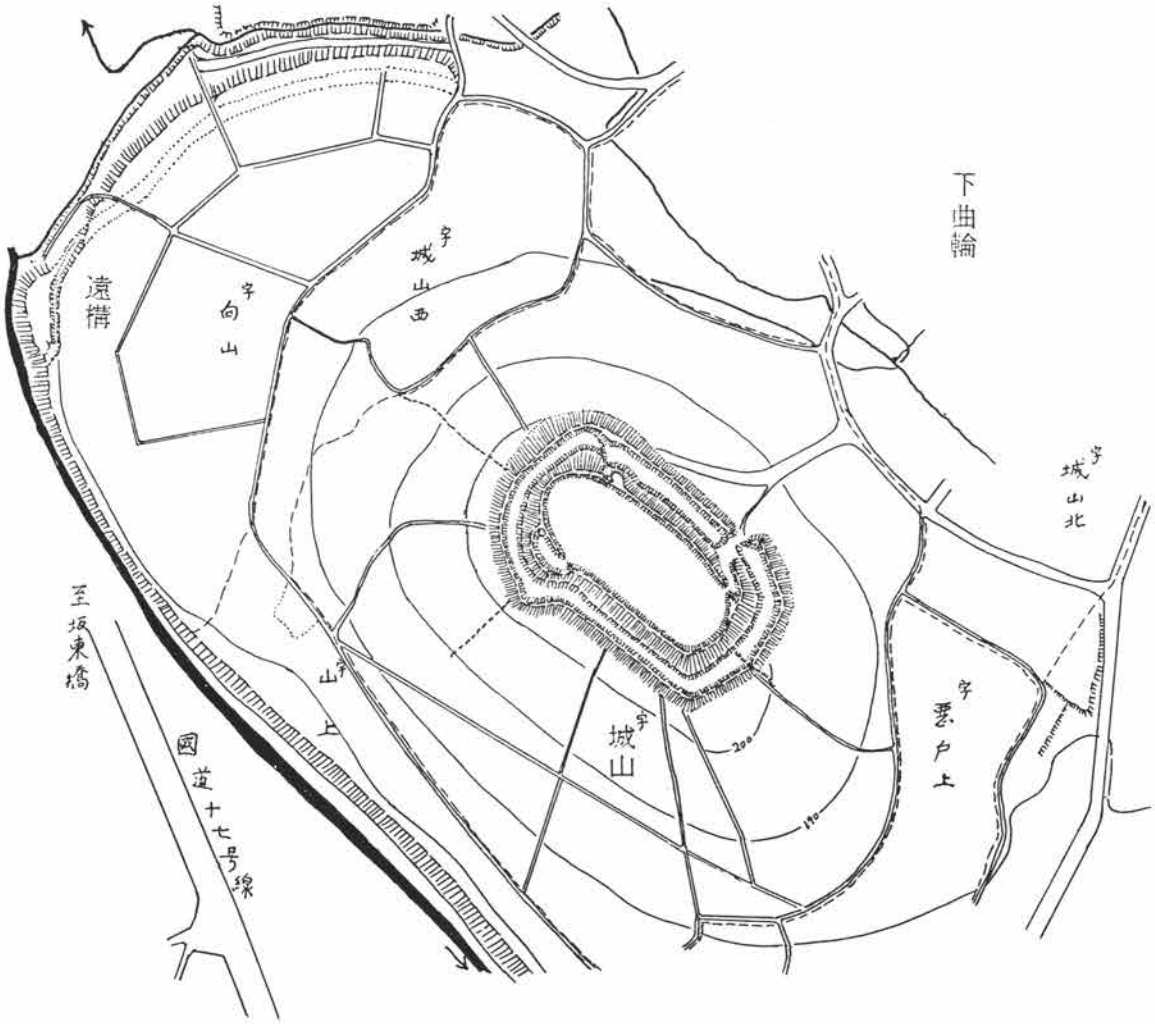

図77　箱　田　城